



# 川東小だより

第2号

令和3年5月14日

新発田市立

川東小学校

## 川東小学校の石碑

校長 岡崎 功一

田んぼの水面に山々の緑や青空が映し出される景色が映える季節となりました。5月に入り気候も穏やかな日が続いています。1年の中で最も活動しやすい季節になりました。

子どもたちは、今、運動会に向けて、三密を避けながら一生懸命に練習に取り組んでいるところです。先日、運動会のご案内を配布させていただきましたが、今回は、新型コロナウイルス感染症予防のために、午前中のみ開催とし、参観も各ご家庭2人までとさせていただきました。どうぞご理解ご協力をよろしくお願いいたします。

さて、私が、川東小学校に赴任して1か月がたちました。校地内を見回ると、玄関前やグラウンドにたくさん石碑が立っていることに気が付きました。そこで、これらの石碑について調べてみました。以下に紹介いたします。(ご存知かもしれませんが・・・)



### 「教育村われらが村」 昭和44年建立

昔、川東村の本間百在門(1876年～1938年)村長が、「村の振興は、教育から」との信念で、村政を主導し、村民も賛同し、受け継がれてきました。当時は、村民が、お金を出し合って学校を建てたり、先生を雇ったりしていた記録が残されています。昔から、地域全体で教育を大切にしていることが伺われます。



### 「筆塚」

昭和9年建立

当時の川東小学校では、書道教育に力を入れていたそうです。

多くの書道大会で、たくさん子どもたちが入選しました。その記念に建てられた碑だと伝えられています。

### 「制帽塚」

大正8年建立

当時の川東小学校の宮村慶悟校長先生が、ご退職されるときに川東小学校の子どもたちの健全育成と学校の発展を祈念して建てられたそうです。



これらの石碑の由来を調べてみると、川東小学校やその子どもたちが、昔から地域の皆さんや先人の方々に愛されてきたことが伺われました。このことについては、5月の全校朝会で、子どもたちに紹介しました。併せて、「地域の皆さんの期待にも応えられるように頑張っていきましょう」という話をしました。

新年度が始まり、1か月半が過ぎようとしています。子どもたちも新しい学年に慣れ、日々の学習活動に頑張っており取り組んでいます。休み時間は、元気に遊具やグラウンドで遊び、校地校舎内に子どもたちの声が響いています。日々の積み重ねを大切にして教育活動を進めてまいりたいと思います。

# ☆☆☆川東小学校 学力向上の2つの取組☆☆☆

## 1 「分かる」「できる」「楽しい」授業の実現

新発田市教育委員会が2015年度に作成した基本的な学習過程（以下参照）を授業の基本として学習を進めています。

### <新発田市授業スタンダード>

- ①つかむ段階（問いをもつ・学習課題を把握する）
- ②考えをもつ段階（調べる・読み取る・解く）
- ③考えを深める・広げる段階（学び会う）
- ④まとめる段階（振り返る）

4つに分類されており、特に新発田市全体の共通取組事項として、授業の「めあて」を板書すること、めあてと正対した学習のまとめを自分の言葉でノートに書く、授業のめあてに正対した「まとめ」を板書することが挙げられている。

## 2 主体的に考える子どもの育成 ～ICT機器を活用した学習活動を通して～

### (1) 取組の背景について

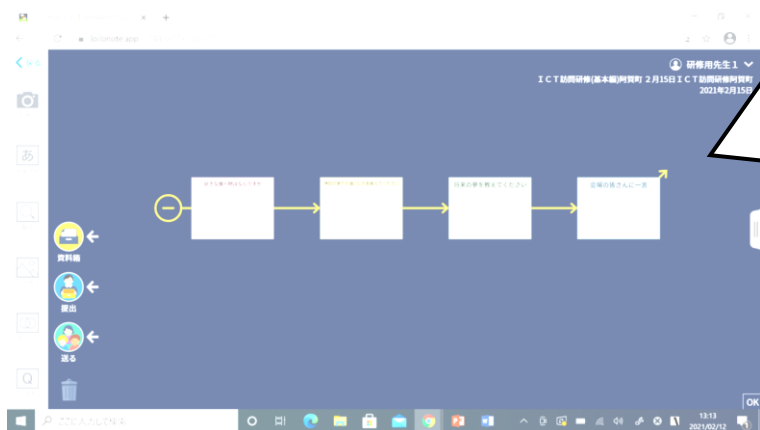
グローバル化の発展や人工知能の飛躍的な進化など、社会の加速的な変化を受け止め、将来の予測が難しい社会の中でも、子どもたちが未来の社会を創り出していくために必要な資質・能力を確実に育むことが求められています。

### 《《 《「各教科等、教育目標・内容」における育成すべきとされる資質・能力》》》

- ①「知識・技能」の習得 …… 何を知っているか、何ができるか
- ②「思考力・判断力・表現力等」の育成 …… 知っていることやできることをどう使うか
- ③「学びに向かう力・人間性等」の涵養 …… どのように社会や世界と関わり、よりよい人生を送るか

### (2) 取組の具体について

主体的に考える子どもとは、「知識及び技能を獲得したり、思考力・判断力、表現力等を身に付けたりするために、自らの学習状況を調整しながら、学ぼうとしている」子どものことを指します。学び方は一人一人違い、表し方も人それぞれであることや上記の背景も踏まえ、個々の学びを保障するには、ICT機器の活用は不可欠です。今年度より支給される一人1台のタブレット端末を使用しながら子どもたちに豊かな学びを獲得させていきます。



### 活用予定教材 (ロイロノート)

クラウドを介して資料、課題の配信、提出（回収）、拡大提示、発表ができます。また、考えや意見を紐付けたり、共有したりすることも可能です。

ICT機器の活用は主体的に考える子どもに育てる手段の一つです。これまでの学び方と合わせて、学習を進めていきます。

(文責：研究主任 米澤 祐児)